

令和3年度「特色ある学校づくり対策事業」実践事例

【学校名】 佐世保市立広田小学校
【所在地】 佐世保市広田1丁目25番4号
【校長】 梶山 和彦
【学校規模】 33学級 児童数959名 (R3.5.1)
【学校教育目標】

主体的に考え 正しく判断して行動できる
心豊かでたくましい子どもの育成



(小学校校舎：1～5年)



(中学校6年生校舎)

1 委託期間 令和3年4月1日～令和4年3月31日

2 目 的

(1) 小中一貫型教育の推進

広田小学校、広田中学校の小中一貫型教育5年目にあたり、昨年度の実践の成果と課題をもとに、コロナ禍であっても可能な限り感染予防対策を講じながら実践を行う。中学校教諭による乗り入れ授業や GT としての出前授業、中学生との交流活動を重視し、円滑に中学校生活に移行することができる連携体制を構築する。また、5年生保護者・地域への説明会（本年度は中学校による成果発表会）を開催し実践内容を報告したり、学校だよりや小中連携だよりを定期的に発行したりして保護者や地域への周知を図る。

(2) 地域人材を生かした体験活動による、心豊かな児童の育成

本校は950名を超える大規模校ではあるが豊かな自然環境地域であると同時に公的機関・大型商業施設等の「人・もの」に恵まれ様々な体験活動を実施することができる。この地域教材を生活科や総合的な学習の時間の学習に生かし学年の発達段階に応じた体験活動と地域の方々との交流活動（コロナ感染状況を考慮しながら）や調べ学習活動を仕組み、各教科等の学習と関連付けながら総合的な学力を身に付けさせる。また、本校に定着している図書ボランティア「よむよむ」の活動を中学校舎の6年生まで広げることにより読書への興味・関心を高めるとともに豊かな感性をもった児童の育成を図る。

(3) 課題を明確にした学力向上の推進・新学習指導要領に即した授業実践

全国学力学習状況調査（6学年）県・市の学力テスト（5・4学年）に加え毎年2・3学年も学力調査を実施する。その結果を分析することで本校児童の課題を明確にし、校内研修を通じて授業改善・指導法の研究に取り組み児童の学力向上に努める。また、「基礎学力の定着」のための学習教材の整備やタブレットによる「eライブラリー」を活用して基礎・基本定着を図る。さらに、校内研修において授業の中に以下の3点を盛り込み「進んで考え表現し主体的に学びを深め合う児童の育成」を目指した授業研究の実践に取り組む。

①見通しをもたせる。（学びの連続性・自力解決につなげる）

②書く活動の設定。（根拠を基に考える）

③振り返りをする。（学びの実感・次時へのつながり）

(4) 特別支援教育と防犯教育の充実を図る環境整備

特別支援教育において特性に応じた教材・教具について、指導目的を明確化した知育玩具を整備することで、自立活動学習や情緒の安定を図るための支援教材として活用する。また、災害や人的被害から身を守るための防犯教育の整備に努め防犯意識の高揚を図る。

3 実践内容

(1) 小中一貫型教育の推進

【6年生が中学生と一緒に取り組んだ学校行事等】

※始業式・終業式は小学校で実施 ※前期始業式のあと 「出発式」(小学校舎) 「歓迎式」(中学校舎) ※体育大会 ※文化発表会の合唱コンクールに参加 ※マラソン大会(距離を短くして6年生も参加) ※駅伝大会(6年選抜チームで参加)	期日	集会・行事等
	4月	6年生歓迎式、部活動紹介
	6月	いのちを見つめる日、6.29平和集会
	7月	前期前半終了 全校集会
	8月	8.9 平和集会
	9月	前期後半開始 全校集会、体育大会
	10月	文化発表会
12月	人権集会、マラソン・駅伝大会	
※前期始業式・終業式、後期始業式・卒業証書授与式は小学校校舎で実施する。		

【乗り入れ授業・出前授業の実践】

- 乗り入れ授業：外国語・音楽の2教科において中学校教諭が専科を担当し授業を行った。
- 出前授業：総合的な学習や体育等の教科においてTTとして中学校教諭が適宜指導に入り教科担任制のよさを生かし専門的な視点から指導の補助を行った。

【6年生と1～5年生・特別支援学級間の交流活動】

- 歓迎遠足：小学校で参加
- クラブ活動：(年間7時間程度)は小学校で実施した。(本年度は4回実施)
- 縦割班活動：(年間3回)6年生が朝から小学校校舎へ登校し1時間目を使って活動した。(本年度2回実施)

【小中一貫型教育についての説明】

- 例年であれば、中学校校舎で6年生が5年生に説明をしていたが、本年度は、6年生が「中学校6年生校舎の生活」について動画撮影したものを5年生は教室及び各家庭で保護者(児童用タブレットを活用)視聴した。また、説明会資料を保護者に配付し次年度からの生活の仕方や予定について周知を図った。また、小中一貫型教育の進捗状況に関する保護者・地域への説明会は11月に中学校で開催された成果発表会で行われた。
- 「小中連携だより」の定期的な発行

(2) 地域人材を生かした体験活動による、心豊かな児童の育成

【第1学年：「お正月の昔遊びと凧揚げ体験(生活科：4月・1月～2月)】

「お正月の昔遊び」(福笑い・コマ回し・お手玉・けん玉)などの遊びで共遊する活動を設定した。1年生を含めた現代の児童は、ゲーム中心の生活が多くなり、人と関わる遊びをすることが少なくなった。アナログ的な遊びに触れ、直接人と関わる遊びの面白さを感じることができた。また、1年生が凧作りに挑戦し、できた凧をもって6年生が学ぶ中学校校舎で交流活動を予定していたがコロナ感染予防のため実施できなかった。しかし、本校舎において手作り凧を楽しんであげることができた。

【第2学年：サツマイモの栽培(生活科：5月～10月)：町探検(生活科：11月)】

ミニトマトの栽培や学校の花壇でサツマイモのツル差しを行い、収穫した。育てたトマトや芋を持ち帰り家族とともに収穫の喜びを味わった。野菜等の栽培に関心をもつ子が増え芋以外に育てた野菜へ水やりを続ける姿が見られた。また、地域の町探検を通して自然・商業施設・地域学校や公共施設等多それぞれの特徴に気付くことができた。コロナ禍のために例年のように保護者の協力を得ての「町探検」活動は実施できなかったが、クラスごとに見学先を決め見学した後、学んだこと発表し学習を深め合った。

【第3学年：地域の史跡を調べよう(総合的な学習：11～2月)】

今年度は、コロナ禍のため例年実施していたお年寄りとの昔遊び交流は断念した。そこで、地域に目を向けた史跡等の調べ活動を行った。地域の歴史に詳しい方をGTとしてお招きし、地域に伝わる史跡や伝統行事について分かりやすく話をしていただき、自分たちの住む広田の町により愛着を感じることができた。その活動から、広田の

歴史にも興味を広げ、住吉神社や古墳跡地、広田城跡などの地域の史跡を調べる活動につなげた。他にも、地域の老人会よりいただいた「宇宙アサガオ（宇宙飛行士山崎直子が宇宙から持ち帰った種の12代目）」を育て、花を咲かせたのちに、アサガオのツルでリースを作り学級や学校を飾った。本活動を通して優しさや思いやり、希望を育てる目標を受け継ぎ、命の尊さや逞しさを学んだ。地域の方にもお手紙を渡し交流を図ることができた。

【第4学年：花の栽培活動（総合的な学習：10～3月）】

「卒業式や入学式を花で飾ろう」とのめあてを立て、地域ボランティア「花づくり協力隊」の協力を得て、花の栽培活動に取り組んだ。苗植え活動を行いながら地域の方と交流を深めることで、植物を大切に育てようとする栽培意欲が高まるとともに、地域の方に対する感謝の気持ちが育った。お礼の手紙は、地域の方に喜ばれ好評であった。

【第5学年：「命と食について考えよう」サツマイモ栽培について（総合的な学習：6～2月）】

4Hクラブ（左世保市農業青年クラブ連絡協議会）、JAながさき西海、県北振興局の協力で、重尾にある4Hクラブ会員の畑を借りて、サツマイモ栽培についての学習に取り組んだ。4Hクラブの方から指導を受け、サツマイモ栽培、販売へ向けての取組について体験活動を行った。さらに、食に関するテーマで調べ学習へと発展させた。本学習を通して、食に関わる人の努力や命の大切さに気付くとともに、日本の食糧事情に対する見方・考え方を深めることで、地域とともにある自分たちの暮らしを実感することができた。

【第6学年：「留学生と交流しよう」（総合的な学習：6～2月）】

長崎国際大学が近隣にあることを生かし、例年大学の施設で児童が日本文化等に関する体験学習を行ったり、海外からの留学生を招待して交流学習を実施したりしている。本年度は、コロナ禍のためZOOMを活用して交流を行った。これらの活動を通して、児童は外国の文化を体験的に理解し、異文化への興味・関心を高めるとともに、日本の文化についても改めて見直す機会となった。さらに、外国語科学習に対する関心も高まった。また、昨年度に続き、小中一貫型教育を生かし中学校教諭による「出前授業」を行い、華道体験を実施することができた。

【特別支援学級：芋ほり体験をしよう（自立活動・生活単元学習：11月）】

小学校校舎（知的・情緒・病弱学級）と中学校校舎（知的・情緒学級）の児童と中学校の特別支援学級の生徒が合同で芋ほり体験を行った。お互いに助け合って芋堀をしたり、掘り出した芋を見ながら喜んだりするなど、協力することの大切さや収穫の喜びを味わうことができた。

【全学年：読書活動の推進（通年）】

火曜朝の時間帯は「朝読書」の時間とし読書活動に親しみ、読み語りボランティアグループ「よむよむ」の協力を得て、学年毎に絵本の読み語りを行った。6年生校舎での活動も定着している。また、図書司書により、良書の選定や読書の奨励、図書館の環境整備等、児童の読書好きを増やすための取組を実施した。

（3）課題を明確にした学力向上の推進

○学力調査に基づく課題の分析と改善に向けた取組

全国学力学習状況調査（6学年）、県・市の学力テスト（5・4学年）、及び2・3学年学力調査を実施。全学年の結果それぞれの結果について、領域別に前年度の結果と比較しながら考察及び分析を行い、改善に向けた手立てを各学年で講じた。基本的な学習内容の定着に向けた対策として、個に応じた学習教材（ワークシートや課題プリント）の整備、朝のチャレンジタイム（月曜日8：25～8：40、高学年では主にタブレットを活用）や家庭学習の課題として活用した。その成果を検証するために4～6年は1月に再調査を実施した。

○研究主題「進んで考え、表現し、主体的に学びを深め合う児童の育成」を設定し、学力向上を目指した授業研究の実践。

○学習と基本的生活習慣の定着を目指した小中の連携

・9年間を系統的に見通した「家庭生活のすすめ」を小中合同で作成し、下敷きとして全家庭に配布。

4 成 果

（1）小中一貫型教育の推進

① 中1ギャップの解消

小中一貫型教育5年目を迎え、6年生が中学校行事や各活動に関わることで定着し、中学生及び中学校職員との日常的な交流ができています。日々中学生と過ごし、決まりなど共通したルールを守ることで、中学校生活に日常的に慣れ親しみ不安なく移行できると同時に、小中学校の児童・生徒が互いの立場を大切に思い合いながら成長でき

る喜びを感じている。小中の教職員も、連携して児童・生徒理解に応じることができており、小学校から中学校への継続した見守りができている。

② 6年生の学習面における効果

中学校教職員の専門性を生かした授業（乗り入れ授業）が定着し、児童の学習意欲及び技能の向上と中学校へのつながりができている。【外国語・音楽】また、GTや「出前授業」という形で、児童のみならず、教師自身のスキルアップも図ることができた。さらに、時計を見て自発的に行動することや始業前の黙想で集中して学習を始める習慣、「自主学習ノート」の活用による家庭学習の習慣が定着した。

③ リーダー性の育成

6年生は、クラブ活動、1～5年との縦割り活動など小学校舎での活動も継続して取り組ませることでリーダー性を発揮させる場面を設定した。中学生と接する機会が増え、集団行動の仕方などを身に付けることで、全ての子どもたちがリーダーとしての在り方を学び、下級生の良い手本となっている。

5年生は、年度始めから小学校舎の最高学年として、1年生のお世話・運動会の準備等に取り組んだ。正門前での「あいさつ運動」、委員会活動での4年生への指導などに1年間を通して取り組み、小学校舎でのリーダーとしての自覚が育った。

(2) 地域人材を生かした体験活動による、心豊かな児童の育成

本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、例年のような地域の「人材・もの」を生かした体験活動が制限されたが、各学年、可能な限りの範囲で企画・運営をした。1～3学年では、地域をテーマにした活動を計画し、地域の施設や自然環境を見学したり、調べたりする活動を通して、地域に愛着をもつことができた。4～6学年では、地域の環境や人材を生かして、テーマを絞った教育活動を展開することができた。4年生は花の苗植え活動を通して、地域の方との交流を深めることで日頃お世話になっている地域の方へ感謝の気持ちを伝えることができた。5年生はサツマイモ栽培から販売活動までの体験を通して、農家の苦勞をや努力を理解するとともに食の大切さについて考えを広げることができた。6年生は国際大学との交流を通して異文化を理解することの必要性を学んだ。さらに、これからは自分たちが国際社会に積極的に関わっていくことが大切であることに気付き、実践意欲が高まった。特別支援学級は、芋ほり体験活動を通して、異学年で協力することの大切さと収穫の喜びを味わうことができた。図書ボランティア「よむよむ」の読み語りや図書司書による図書館整備により、書物への親しみを持ち、図書室の利用が活性化され、学年に応じた読書活動ができるようになった。

(3) 課題を明確にした学力向上の推進・新学習指導要領に即した授業実践

年度始めの学力テストは、2・3年生も実施することで、国語・算数において、各学年の課題、全校的な課題を把握することで課題が明確化し、課題改善に向けた基礎基本（計算力）の強化に取り組むことができた。本校の児童に、多様な考えから判断力・思考力・表現力を付けるために、校内研修では自分の考えを文章・図を活用して表現する「書く活動」の手立てや朝の基礎学力充実の時間の確保、家庭学習との連携の積み重ねで基礎学力の定着やねらいとする力に迫ることができた。

(4) 特別支援教育と防犯教育の環境整備

特別支援教育の教具等が揃ったことで、支援内容に合わせて教材・教具を活用することができ個別指導の充実につながった。また、通常学級に在籍する配慮を要する児童の個別指導にもかつ王できた。運動場安全ネットの整備や小中連携のぼり旗（安全宣言）の設置により、児童の安全に対する意識の向上につながった。

5 今後の課題

①小中一貫型教育のさらなる充実に向けて

- 6年と1～5年・の縦割活動（小学校校舎）や交流活動（中学校校舎）の充実を図る。
- 指導方法や評価について、小中教職員間の研修を深める。（リモート研修の充実）
- 9か年を見通した、児童・生徒の基本的な学習習慣・生活習慣の確立を図る。（家庭生活のすすめの定着）
- 地域・保護者への継続した経過説明を実施する。

②地域教材（人・もの）のさらなる効果的な活用に向けて

- 中学校や地域人材との連携を図り、9か年を通して「夢・憧れ・志」を抱かせる体験活動を計画する。

③学力向上に向けて

- 学力調査の結果を分析するとともに、課題を重点化し、課題克服に向けた系統立てた指導をする。
- 家庭と連携して、家庭学習の習慣化と質の向上を図る。

【事例紹介】



令和3年10月8日

終業式後に、全校児童で集団下校を行いました。その時に、通学路の安全点検をするために保護者や地域、警察の方をお呼びして、「通学路安全・防犯パトロール」を行いました。これは、子供たちが安心して通学できるように、保護者や地域の方に学校に集まっていただき、子どもたちと一緒に通学路の危険箇所を確認してもらいながら下校してもらう取組です。この取組は毎年、この時期に実施していたのですが、昨年度はコロナのために中止にしていました。今年はコロナ感染防止の対策を万全にしながら実施しました。地域や保護者の皆様に声をかけていたところ、50名近くの皆様に集まっていただきました。子供たちの安全に対する関心の高さを改めて感じる事ができました。



令和3年2月まで広田小学校の校庭に面した場所に、榎の木が立っていました。長年、子どもたちのことを見守ってくれていたこの榎の木ですが、数年前から病気にかかり、倒木の恐れもあるという状態になっていました。そこで、伐採することにしました。しかし、歴史ある木なので、記念に残したいと考え、切り株を残し、その場所に記念プレートを設置しました。記念プレートには、3年生がこの榎の木について総合的な学習の時間に調べてくれた内容を載せています。